『浮雲』の文体推移―『怪談牡丹燈籠』との比較から―

修士学位請求論文要旨

国際日本学研究科　国際日本学専攻

日本語学・日本語教育学研究領域　4910126005

島田　　むつみ

『浮雲』の文体推移―『怪談牡丹燈籠』との比較から―

国際日本学研究科　国際日本学専攻
日本語日本語教育学研究領域　４９１０１２６００５
島田　むつみ

「修士学位請求論文要旨」

日本初の言文一致体小説として知られる二葉亭四迷『浮雲』が発表されたのは、一八八七年から一八八九年にかけてのことである。『浮雲』が発表される三年前、一八八四年に当時大人気の落語家、三遊亭円朝の高座『怪談牡丹燈籠』が、若林玵蔵の速記により筆写された。これは速記本として一三冊分冊の形で発売されたが、この速記本『怪談牡丹燈籠』は、『浮雲』に大きな影響を与えた作品として知られている。『怪談牡丹燈籠』を読み、円朝の語り口に魅せられた坪内逍遥が、当時何か書いてみようと思っていた二葉亭四迷に、「君は円朝の落語を知っていよう、あの円朝の落語通り書いてみたらどうか」と助言し、それにより二葉亭四迷が『浮雲』を書き始めたことは、文学界においては有名な話である。

では、円朝の落語通り小説を書いてみたら、一体どのような文章になるのであろう。そんな興味とともに『浮雲』と『怪談牡丹燈籠』を読み比べてみると、『浮雲』第一篇は確かに似ている感じがするが、第二篇、第三篇と読み進めていくと、似ている部分が少なくなるように感じられる。「似ている」と感じる部分はどこで、「似ていない」と感じる部分はどこなのか。最初は似ているように感じていたものが、なぜ途中から似ていないように感じてしまうのか。これらの疑問を解決することが、本稿の研究のきっかけである。

二葉亭四迷が『浮雲』を発表した一八八〇年代半ばから後半は、いわゆる「言文一致運動」が盛んに行われていた時期であった。「言文一致運動」とは、話し言葉と書き言葉を一致させようとする運動のことであり、「言文一致」という言葉自体は、神田孝平が「文章論ヲ読ム」の中でこの言葉を用いたことがきっかけとなっている。

幕末から明治にかけて、文章は「文語体」と言われるスタイルを持ち、文末は平安時代から続く「なり」「けり」といった助動詞によって結ばれていた。一方、話し言葉は平安時代からはだいぶ変化しており、話し言葉と書き言葉の乖離はかなりのものになっていた。このような不便な書き言葉を改善し、新しい「言文一致」による文体を確立しなければならないと、当時多くの文学者たちが考えていたが、「言文一致」を実行するのは、大変難しいことであった。それは何故か。

日本語の話し言葉では、文末は相手との関わりにより、「です」「ます」を使うのか、敬語を使わずに話すのかという問題がでてくる。「会話文」をただ小説の中に書くときには何の問題もないが、「話すように」地の文を「書こう」とするときは、一体どんな文末を使うのがふさわしいのだろうか。作家たちはこの点に大変苦心したことが知られている。二葉亭四迷本人も、『余が言文一致の由来』の中で、「で

す」調でいくか「だ」調でいくか迷ったが、坪内逍遥に「敬語のない方がいい。」と言われ、その通りにやってみたが、不服の点もないではなかったと述べており、その悩みのほどがうかがえる。

一八八四年に発表された『怪談牡丹燈籠』は、地の文まで円朝の語り言葉で書かれている「口語体」の作品であり、その点がそれまでの作品とは全く違っていた。どのような文末表現をすればいいのかと悩む作家たちの前に、円朝の『怪談牡丹燈籠』は、生きた文章のサンプルを提供することになったのである。

『浮雲』に大きな影響を与えたものとして、『怪談牡丹燈籠』の他、ロシア文学の存在も忘れてはならない。二葉亭四迷はロシア文学者としても知られており、ツルゲーネフを初め多くのロシア文学を翻訳しているが、このことからも四迷が『浮雲』執筆にあたりロシア文学からも大きな影響を受けていることが予想できる。しかしながら、翻訳者である四迷はロシア語を原文としてみているのであり、それをそのまま日本語の文章の参考にはできなかったであろう。彼がロシア文学から参考にしたのは、時制や人称といった小説の「書き方」であり、日本語の参考として、まずは円朝の『怪談牡丹燈籠』が大きな影響力を持っていたのではないかと考えられる。

これらのことから、本稿ではまず『浮雲』と『怪談牡丹燈籠』の文末を比較することにした。

さらに、作品そのものの印象を左右するのは、一文の長さや、「語り手」の登場、オノマトペの使用といった印象的な表現が大きな影響を与えていることに注目し、これらの表現についても、比較検討を試みた。

その結果、以下のことがわかった。

『浮雲』第一篇は、①文末表現において、動詞の終止形の多用という点で、『怪談牡丹燈籠』との類似点が見られる。しかし、『怪談牡丹燈籠』で見られるような、「です」「ます」「ました」という敬体を用いた表現は見られない。これは、二葉亭四迷本人が、「敬体を用いずに書く」と決めていたためである。また、『怪談牡丹燈籠』ではあまり見られなかった体言止めも多く使用されている。打消しの助動詞は、『怪談牡丹燈籠』同様あまり見られず、その使用方法もあくまで「状況を否定する」というものに限定されている。②その他の表現においては語り手の登場や一文の長さ、オノマトペの多用という三点すべてにおいて『怪談牡丹燈籠』との類似が見られた。

『浮雲』第二篇では、①文末表現では、過去の助動詞「た」を多用し始め、動詞の終止形の数が激減する。また、「体言止め」も三分の一に減少する。さらに、登場人物の心情が打消しの助動詞を伴って、独り言や会話ではなく、地の文に書かれ始めるという大きな変化を見せることになる。②その他の表現においては、『怪談牡丹燈籠』の特徴の一つであった、作者の作中への関与が姿を消すことになる。しかし、一文の長さ、オノマトペの多用という点においては、依然として『怪談牡丹燈籠』との類似が見られる。

『浮雲』第三篇では、①文末表現において、再度動詞の終止形の

数が増加し、過去の助動詞「た」との併用が見られるようになる。また、体言止めもやや増加する。一方、登場人物の心情が地の文に書かれるという傾向はより強くなり、打消しの助動詞をはじめ、推量の助動詞なども多用され、登場人物の心境の変化を物語っている。②のその他の表現においては、『怪談牡丹燈籠』との大きな類似点であった一文の長さに変化がおこり、一文が短く簡潔なものとなった。作者の作中への関与もやや認められるが、第一篇のような「語り口調」とは異なっている。オノマトペの使用も少なくなり、②のその他の表現に関しては、『怪談牡丹燈籠』との類似点はあまり見られなくなる。

『怪談牡丹燈籠』の影響は、第一篇において顕著なことがわかるが、その大きな特徴が「語り口調」であった。『浮雲』第二篇第八回で「語り口調」が消えるが、このとき「た」形の多用や地の文に主人公の心情が書かれるようになるという変化も起こり始める。これにはロシア文学の影響が考えられる。第三篇でも、明らかな「語り手」は登場しないが、一方で動詞の終止形のと「た」形の併用など、可逆的な推移も見せる。これは二葉亭四迷の「文体の揺れ」として捉えられよう。『浮雲』は日本初の言文一致体小説として知られているが、その文体は全篇を通して変化しており、決して完成されたものではなかったと言える。

しかし、『浮雲』が言文一致の文体を試み、その後に続く作家たちの「文体見本」となったことは間違いないのである。

今回の調査を通して、筆者は今までに見られない観点を発見した。『浮雲』に関しては、従来の研究では第二篇第八回より、作者の視点に変化があり、それまで作品中に見られていた「語り口調」が姿を消し、内容にも変化が見られるとされている。しかし、それが文末表現にどのような影響を与えたのかという具体的な指摘はなされてこなかった。今回、すべての文末表現を調べた結果、作者の視点が変化したとされる第二篇第八回以降、明らかに文末に打消しの助動詞や推量の助動詞の数が増加しているという変化を見て取ることができた。これらの助動詞がなぜ増加したのかを見てみると、そこには作者の視点の変化による内容の変化が浮き彫りになる。実は第二篇第八回以降、作者はそれまであまり触れてこなかった主人公の「内面」を描くことに視点を写し、それにより主人公の気持ちが作品中に描かれることになる。主人公の気持ちが描かれることで、文末表現に第一篇とは明らかに違う変化が起こっていたのである。この点については、本稿第三章第二節（三）をご覧いただきたい。